

近畿学校保健学会通信

№ 67

平成 2 年 8 月 31 日 発行

近畿学校保健学会事務所

〒640 和歌山市九番丁27

和歌山県立医科大学衛生学教室内

T E L 0734-26-8324(直通)

振替口座 大阪4-107021番

目 次

第37回近畿学校保健学会を終えて.....	1
第37回近畿学校保健学会報告.....	3
1. 総会記録.....	3
2. 一般講演についての座長コメント.....	6
3. 学会長講演.....	12
4. 特別講演.....	12
5. 要望課題.....	13
6. 学会印象記.....	14
名誉会員、評議員名簿.....	18
平成 2 年秋の関連全国学会・大会案内.....	4

第37回近畿学校保健学会を終えて

第37回近畿学校保健学会

学会長 大 山 良 徳

ことのほか今年は猛暑が続いています。お見舞申し上げます。本年度（平成 2 年）は、大阪にて花の万国博覧会が開催されており、奇しくも同時期に第37回近畿学校保健学会を、大阪なにわ会館にて 6 月10日(日)、開催できまして、大変記念すべき学会となりました。当日は昨夜来から心配しておりました天候も、薄日さえさすほどに回復いたし、会員各位の出足も順調でありました。

本学会は、近年の慣習を破って日曜日に開催いたしましたが、全体的結果からみて、それほど支障はなかったように思えます。当日の参加者は一般会員、当日会員など、午前中だけでも 190 名を数えるに至りました。なお学会当日には、名誉会員の伊東祐一、川畑愛義、佐守信男、山田 一の各先生方のご臨席を賜わり光栄に存すると共に、学会の力強さを認識いたしました。

会場は講演3会場のほか、展示室、会員控室それに接待室を含めて6室を用意しました。しかも、環境条件を考えて最寄駅から近いこと、冷房設備が完備していること、学会場としての品位を保てることなどに気を配りました。しかしソフトの面で、ご満足いただけたかどうか心残りもしないではありません。

午前中は、各会場において活発な研究発表が展開され、一般講演数29題に達し、熱心な討論が行われましたことは、未だに記憶新たなところであります。これにひきかえ、午前中の後半には学会長の不十分な講演にもかかわらず、多くの会員の皆様が耳を傾けていただきましたことに対し、心から感謝の意を表します。午後からの特別講演では、大阪大学微生物研究所教授・三輪谷俊夫博士を迎えて“輸入感染症と子どもの健康”についての講演が行われました。このなかで、学校保健のもっとも基本的な保健指導、予防実践活動としての飲料水の実態、手指の清潔、冷蔵庫内の細菌分布の実態、食品の加熱摂取の重要性等について、国内外の具体的事例をお示しいただいたことが、大変印象深く残っています。

本学会初の、シンポジウム形式による学会長要望課題“都市化の中の子どもの健康”に関しましては、10名の応募者があり、その関心の程度がいかに高かったかを推測することができました。何分にも時間の関係で、止むなく5名の演者に限定させていただきましたが、演者それぞれの立場で特有な子どもたちの実態について、有意義な報告がありました。他の5名の演者には、一般発表の部で貴重なご発表をいただき、共にこの領域の発展に華を添えて下さったことに対し、感謝いたしております。

学会さいごのイベント懇親会には、会場狭しと思われるほど多数の会員のご参加をえて、賑やかに、楽しく、歓談しながら時の経つのを忘れました。このように、本学会すべての行事が盛会のうちにつがなく終了いたしましたことは、参会者各位のご支援によるものと心から感謝申し上げます。なお、平成3年度、第38回学会は天理大学河瀬雅夫教授を会長として、奈良県で開催されることになっています。

最後になりましたが、今回の学会に寄せられました会員各位のご熱意とご支援、幹事ならびに評議員の諸先生方のご協力に対し、厚く御礼申し上げます。さらに、大阪府教育委員会、大阪市教育委員会のご支援、大阪府医師会、大阪府歯科医師会、大阪府薬剤師会のご協賛、関係会社各位のご援助に対し深謝いたします。また、運営委員としてご助言やご協力賜りました地元大阪の先生方にも、ここに記して感謝の意を表します。

本学会の時代に即した益々の発展を祈念いたし、結びのことばといたします。

第37回近畿学校保健学会報告

本年度の第37回学会は大阪地区のお世話になり、平成2年6月10日(日)、なにわ会館において開催されました。本学会発祥の地での開催でしたから、第1回学会の学会長を務められた伊東祐一先生をはじめ多数の名誉会員の先生方が参加され、しかも学会長講演や要望課題の座長をもお引き受けいただき、まさに熟年パワーに圧倒された感がありました。ただ、残念なことには学会当日はお元気なお姿で参加していただいた山田 一先生が1か月後に他界されたことで、まだまだ御指導いただきたい問題が山積していただけに悔んでも悔みきれない想いがしております。勿論、名誉会員だけでなく多くの若い会員も多数参加され研究発表や活発な討論が熱っぽい雰囲気の中で展開されました。

学会長講演、特別講演、要望課題と特色ある企画をたてられ、その運営に非常に御尽力いただいた大山良徳学会長、平井富弘事務局長をはじめ多くの大阪地区の会員の方々に、心からお礼申し上げます。

以下、今までの慣例に従って当日の総会の記録、一般講演の座長のコメント、学会長講演・特別講演・要望課題のまとめ、学会参加者による学会印象記を掲載して学会報告にかえさせていただきます。

(幹事長 武田真太郎)

1. 総会記録

1) 学会長挨拶

第37回年次学会長の大山良徳大阪大学教授が挨拶。

2) 議長選出

住野公昭神戸大学教授が全員の拍手により議長に選出された。

3) 議事

平成2年度第1回幹事会の報告として、平成2・3年度の評議員・幹事の選出結果(18・19ページ参照)ならびに幹事長の互選結果が報告された。

(1) 平成元年度会務報告

①会員数 368名(平成2年3月末日現在)詳細は別表1参照

②会議の開催、学会通信の発行など

平成元年5月13日	第1回幹事会
5月31日	学会通信No.63発行
6月24日	兵庫県民会館において第36回年次学会を開催 (会長 神戸大学 住野公昭教授)
6月24日	兵庫県民会館において平成元年度評議員会及び総会を開催
8月20日	学会通信No.64発行

11月18日 第2回幹事会

平成2年1月15日 学会通信No.65発行

(2) 平成元年度決算報告、会計監査報告

松本幹事長補佐より決算報告があり、横尾監事の監査報告をうけて承認された(別表2)。

(3) 平成2年度予算案について

武田幹事長より説明があり原案どおり承認された(別表3)。

(4) 名誉会員について

武田幹事長より幹事会で推挙され、評議員会で承認された安藤格、今井英夫両先生の紹介があった。次いで大山年次学会長から両先生に名誉会員記が手渡された。

(5) 次期(第38回)学会開催地および会長について

第38回年次学会は奈良地区で開催されることが了承され、学会長を天理大学河瀬雅夫教授にお願いすることになった。

(別表1)

近畿学校保健学会会員数

(平成2年3月31日現在)

		名誉会員	評議員	一般会員	計
滋	賀	1	25	11	37
京	都	1	38	48	87
大	阪	2	49	31	82
兵	庫	1	23	47	71
奈	良	2	22	18	42
和	歌 山	3	27	16	46
そ	の 他			3	3
計		10	184	174	368

平成2年秋の関連全国学会・大会案内

第37回日本小児保健学会

10月3・4・5日

日本都市センター(東京都)

第37回日本学校保健学会

10月18・19日

札幌市教育文化会館(北海道)

第6回日本精神衛生学会

10月25・26日

東京ガーデンパレス(東京都)

第49回日本公衆衛生学会

11月7・8・9日

徳島市立文化センターほか(徳島県)

第40回全国学校保健研究大会および関連行事

11月14・15・16・17日

那覇市民体育館ほか(沖縄県)

(別表2)

近畿学校保健学会 平成元年度決算報告

(平成2年3月31日)

収入の部

	予算額	決算額	増 減	摘 要
会 費 収 入	870,000	903,000	33,000	会費納入者 301名
繰 越 金	453,507	453,507	0	
雑 収 入	6,000	8,763	2,763	利息
合 計	1,329,507	1,365,270	35,763	

支出の部

	予算額	決算額	増 減	摘 要
印 刷 費	300,000	291,410	△ 8,590	通信No.63, 64, 65
郵 送 費	170,000	150,754	△ 19,246	
事 務 費	100,000	73,790	△ 26,210	
人 件 費	45,000	45,500	500	
会 議 費	30,000	51,618	21,618	
交 通 費	15,000	26,640	11,640	
学 会 補 助 費	200,000	258,000	58,000	大阪へ支払分(200,000円) 神戸へ新入会員分29名(58,000円)
予 備 費	469,507	0	△ 469,507	
(小計)		(897,712)		
次年度へ繰越		467,558	467,558	
合 計	1,329,507	1,365,270	35,763	

会計監査の結果、上記に相違ありません。

平成2年4月21日

監事

横尾能範
三宅義海

(別表3)

近畿学校保健学会 平成2年度予算

収入の部

	金 額	摘 要
会 費 収 入	870,000	290名
繰 越 金	467,558	
雑 収 入	6,000	
計	1,343,558	

支出の部

	金 額	摘 要
印 刷 費	300,000	通信No.66, 67, 68
郵 送 費	170,000	
事 務 費	100,000	
人 件 費	45,000	
会 議 費	30,000	
交 通 費	15,000	
学 会 補 助 費	200,000	
予 備 費	483,558	
計	1,343,558	

2. 一般講演についての座長コメント

第1会場

演題番号 (101～102)

南

哲 (神戸大学)

演題 101: 定時制高校生を対象に、学校環境での適応状況を実態調査したものである。女子が将来への不安を高めていることと、男子があきらめの心境にあることや、男女共に心身の緊張や拘束による症状の発現が多いことが報告された。教育指導にあたる教師が、より深く高校生を理解する上で、貴重な示唆を与えてくれる研究報告である。

演題 102: 学齢期の神経科受診患者の動向を分析し、15才をピークに、低学年では多動・情動障害・てんかんなどが主訴で、高学年では症状が多様化することや、対照の中・高校生の調査を通じて、慢性的な疲労感や無力感が背景にあることが示唆された。質疑の中で、問題発見からの取組で大学病院との連携が紹介された。今日、学童の精神保健が重視される中であって、今後の研究成果が大いに期待されるところである。

演題番号 (103～104)

金 井 秀 子 (京都教育大学)

演題 103: 演者は養護教諭有志によるヘルスカウンセリング研究会で指導をしておられ、研究対象となった心因によると思われる29ケースについて報告され、養護教諭がおこなう保健指導のポイントについて臨床的心理学的なアプローチと学校ならびに家での人間関係の調整の重要性と、更に、養護教諭としての守備範囲を自覚することも指示された。質疑も活発になされ、関心がよせられた。

演題 104: 心身に悩みを持つ生徒を早期に発見するために中学生用簡易健康調査質問紙票を用いての実践報告である。全生徒を対象に学校全職員の協力のもとでおこない、Ⅰ～Ⅳ型に分け要注意・要指導の生徒をスクリーニングし、一方生徒の行動記録をとり両者とも関連性があることを示唆した。要指導の中には担任と養護教諭の連携のもとに指導が必要であることを述べられた。

演題番号 (105～107)

後 藤 英 二 (大阪教育大学)

演題 105: 学校プールの飛び込み時事故の重度傷害防止対策ならびに合理的な安全教育に寄与する目的で、小学校5年生男子をモデル化した人形により、入水角度と体重の変動が潜水深度に及ぼす影響について実験検討した。

その結果、安全到達水深70cm (近年の学校プール飛込台付近80cmの水深もあるので) 以上潜水したのは、入水角25度で体重49kg以上と、30度で体重が39kg以上であった。したがって、飛び込み時の安

全入水角度は15度～20度である。

この報告は、飛び込み時の脚力差、浮力差などを無視し、できるだけ単純化しモデル化したものではあるが、一応、合理的な安全指導の資料を提供したと評価できる。

演題 106：最近腰痛を訴える学生生徒が多いので、加齢による発生率の変化ならびにその原因の明確化を目的として、女子大生（女子生徒に発生率が高いため）にアンケート調査、体格、体力、運動能力測定ならびに脊柱機能検査（クラウスウエーバ法）を実施、比較検討した。

その結果、約半数が腰痛経験者であり、中・高校生より増加傾向であった。「同じ姿勢を長時間続けたため」、「思い当たることがない」の回答が多かった。また、腰痛群は体力・運動能力に優れていても、背腹筋持久力が弱かった。そこで、筋持久力の弱さが腰痛発生の一誘因と考えられた。

したがって、この報告は、腰痛発生の予防対策として、筋持久力の強化鍛練運動が必要であることを示唆するものである。

演題 107：児童に対し冷湿布マッサンマ（和洋合体のマッサージとあんまを組み合わせた手技）を実施し、その作用と効果について、皮膚温、血圧、指尖容積脈波で測定検討した。

その結果、乾布まさつと異なり皮膚温上昇し、さわやかな温暖感を与え、血圧も一時上昇するが、その後低血圧となり、脈波高も減高つまり血管が拡張した。これは、物理的刺激が、循環器、呼吸器、神経系にも好影響を与えたものと考えられる。したがって、冷湿布マッサンマは、季節、場所をとわず簡便な、広く一般児童生徒、虚弱者、病弱者にも適応出来る皮膚鍛練法である。

この報告は、冷湿布マッサンマが、有効な疾病（インフルエンザ）予防の手技であることを提示したものである。

演題番号（108～109）

三 野 耕（兵庫教育大学）

演題 108：一般学生に加えて運動クラブに所属している女子大学生を対象として一日のエネルギー摂取量と消費量との関係から女子学生の生活について検討したものである。その結果から運動選手では、とくに練習日のエネルギー摂取の適切な指導、一般学生では、とくにエネルギー摂取に関わる余暇での身体活動等の指導の必要性を考察した。その際のエネルギー消費量についての算出の方法について従来のRMR法だけでなく、1日の心拍数から消費量を予測するHR法を用いることを試み、よりフィールド研究に近づけようとしたもので、その方法について今後の結果が待たれる。

演題 109：健康に主眼をおいた中高齢者と子どもとのふれあい教育を進めるに当たって、中高齢者の運動に関する意識調査をしたものである。

高齢化社会での学校教育において、これら中高齢者と子どものふれあい教育はより深刻な問題となるであろう。とくに、学校保健教育において、この問題にかかるウエイトは益々大きくなると予想され今後の研究が期待される。

第2会場

演題番号 (201~202)

林

正 (滋賀大学)

演題 201: より適切な机、椅子の使用にあたって、より簡便な下腿長の適合方法を求めるために性
年令別に下腿長と身長一座高の一次及び二次の多項式を求め実測値と推計値は ± 2.0 cmの誤差で推計
できることが報告された。

武田教授から佐守らの検討はマルチンの測定法によっているので、その誤差が $+ 2.3$ cmとなってい
るのではないかと意見があった。より簡便な方法の確立により適切な机・椅子の使用への発展を期
待したい。

演題 202: 演者らが長年とりくんでこられた最大発育年令 (M I A) の下肢長への適用と母子保健
指標 (乳児、新生児、周産期死亡率) の年次推移との時間関連を検討した報告である。母子保健指標改
善の順は乳児、新生児、周産期死亡率であり、下肢長のM I Aの若年化は社会経済水準の改善に加え
て思春期の発育があらわれるまでの時期の社会経済状態がかかわって、下肢長のM I Aの若年化が乳
児と新生児死亡率の間に位置づけられたことから下肢長のM I Aが健康指標の一つになりうるものが
指摘された。

美崎教授より誤差の多い座高から求める (身長一座高) 下肢長より身長の方がいいのではないかと
の質問があった。武田教授より下肢長利用の方が身長よりもより Sharpに反映するのでその意味での
利用を考えたとの追加発言があった。

演題番号 (203~204)

松 本 健 治 (和歌山県立医科大学)

演題 203: 中学生を対象に身体計測、性的成熟度および脂質摂取量を調査してそれらの相互の関連
性を検討したものである。美崎 (神戸大) から3日間の食事調査で身体発育の性的成熟を評価するこ
との疑義が出されたが、毎年調査することで捕捉できると考えるとの回答があった。また、三野 (兵
教大) からの男の声変わりと女の初潮を同等に扱ってよいかとの質問に対して、テストステロン、エ
ストラジオールを調べており、集団を捉えるために今回は声わりと初潮をみたとの回答があった。

演題 204: 中学生女子を対象にその運動能力および体力診断テストの各項目の成績を兵庫県全体お
よび全国の成績と比較したものである。安藤 (大阪府医師会) からの走り幅とびは跳んだ距離か、踏
み切り板からの距離かとの質問に対して、実測値を採用した旨の回答があった。先の演題と同様に小
児期からの成人病予防に関する疫学調査の試みは意義あるものであるが、因果関係を検討するための
手段に若干の疑問が残るとの指摘があった。

演題番号 (205～207)

横 尾 能 範 (神戸大学)

演題 205: 「ファミコンの効用」は、学童前期のファミコン利用に関する母親からの聞き取り調査をもとにして、ファミコンは「子供の集中力向上に役立つ」、「子供をメカ好きにする」と、母親に思われており、子供自身にとっては、「有能感を得られるもの」であるという実態が報告された。

このような母親の期待が事実かどうかの今後の実証がわれわれ研究者の役割となろう。

演題 206: 「小学生のおやつ摂取状況」は、商品化された「おやつ」の摂取状況を肥満児対策の視点から調査された結果が報告された。学校から帰宅後夕食までの間、殆どの児童が、スナック菓子、アイスクリーム、ジュース、飴など栄養上問題の多い間食を摂取している実態が明らかにされた。

副題とされた肥満児との関係については、調査人数や調査対象の割り振りの都合で統計処理がされておらず今後の課題となった。

演題 207: 「小学生の脂肪酸摂取パターンの特徴」は、わが国の脳溢血、糖尿病の多発地域における学童の栄養調査から、コレステロールと脂肪酸の摂取状況の検討結果が報告された。その結果、海外の資料に比べ脂肪酸では多価不飽和脂肪酸の摂取が多く、コレステロール摂取では、量的な差は殆どないが構成比で卵に由来することが多い、とまとめられた。

演題番号 (208～210)

山 本 公 弘 (奈良女子大学)

演題 208: 明瀬好子他: 都心の中学校における健康教育へのウェルネス・ムーブメントの一試行—コンピュータ活用による健康教育—健康診断のデータがパソコンのデータベースへ入力されるようになった。これを活用し子どもに還元してこそパソコン導入の意味がある。演者らはユニークな形式で出力したデータを教育に用いている。今後の教育の良い参考となるものと期待される。

演題 209: 北山敏和他: ライフスタイル教育の現状と展望—欧米の実践的健康教育の比較とわが国での実施の可能性—成人病がライフスタイルとの関係において考えられるようになった。そこで子どもに対する健康教育が重要となる。この発表では欧米の健康教育のカリキュラムなどが分析されわが国の実状と比較された。その結果、必ずしもわが国にそのまま応用できない点についても指摘された。今後のわが国の健康教育を進めるにあたって貴重な調査となるものと確信し、演者の活躍を期待している。

演題 210: 岩本スミ子: 子どもたちは温もりのかかわりを求めている—子どもに暖かい愛情を持ちながら、現場で頑張っておられる様子が、ドラマのように臨場感をもって伝わってくる発表であった。今後も子どもたちの健康のために尽力していただきたい。

第3会場

演題番号 (301～303)

辻 立 世 (府立千里高校)

演題 301: パソコンに蓄えた定期健康診断における四計測値データを統計処理だけでなく、保健学習や保健指導に活用している。発育測定用個表は、測定時に伸びの情報を即座に与える。月別体重測定記入表は担任の事務量の軽減と見やすさがある。統計は保健だよりも。健康診断結果通知は、身長と体重のバランス状況を図示、肥満児指導へ。入学時からのデータで発達状況を性教育導入資料に。卒業時のカードへの活用などであり、これらのデータは年間を通じて有効に活用できるとの発表であった。

演題 302: 児童が、パソコンの基本操作を学習している実態にそって、S62年度より、保健指導面での活用を試みた。児童への保健情報提供に関して、保健室におけるパソコン利用についての意識調査の結果を考察した。

パソコン目的のみで来室する児童は少く、パソコン目的の来室児の遊びの嗜好は他と差はない。自由にパソコンが使用でき、保健室にパソコンがあった方がいい、と35%も回答。けがや病気以外で、指導の場、保健教育の発信地、生涯教育の場として、今後の保健室のあり方を考えたい。と前向きな保健室経営が想像できた。

演題 303: パソコンソフト供給の対象を、卒業生から一般希望者にも広げ、身長と体重の値を使って作成する「保健室からの卒業祝い」ソフト利用希望者を募った。利用申込をした300校の地域分布を分析したところ、校種内訳は小/中/高/養の順に168/120/40/3で、地域別では、近畿圏に近い四国と、東海中部北陸圏に申込み高率地区の集中が認められた。この状況は保健室における情報処理に関する人的及びハードウェアに関する準備状況の分布を表わしているようであるが、学校保健へのパソコン普及とユーザーの育成に期待している。

演題番号 (304～306)

上 延 富久治 (大阪教育大学)

演題 304: 「新人類」すなわち現今の若い世代の意識、行動や価値感等に「旧人類」に比して大きな変化がみられることから、1988年と1989年の両年、N女子大生を対象に、入学年度別にデートや結婚の相手等に関するユニークな意識調査を行い、比較したものである。入学年度によって多少の意識の相違が窺えるが、総体的には、大学生活を通じて得た教養にはあまり影響されていないようで、1年後の意識の変化については有意差は認められないということである。

なお、N女子大は平均的な大学か。2回生(1988年度入学生)が3、4回生に比して1、2の項目で特異的に高い割合を占めている点、どのように考察されているかなどの質問があった。

演題 305: 女子高校生、短大生および保護者(女性)を対象に、①健康意識、②健康行動、③運動、休養、食事・栄養に対する充足感等のアンケート調査をまとめたものである。①の項目のうち、高校短大生ともストレス、歯、肥満について、保護者ではそれらに加えて成人病に対する不安が多かった。

②の実施率（高校、短大生）では「過労に注意し、睡眠・休養を十分取る」が約50％で最も高く、次いで「食事・栄養に気を配る」が20～30％、「運動・スポーツをする」は第3位であったが、10～20％と可成り低く、またその充足感も低いことなどから健康づくりのための意識の高揚を強調していた。

演題 306：女子高校生を対象に、老人（高齢者）をどのように見、感じ、また自分の老後をどう考えているか等の意識調査である。主な内容として、老人と思い始める年齢区分は70歳代（33.3％）、その判断基準として体力をあげている者（31.9％）が最も多い。その他、老後の生活設計とその具体的内容について、老後に対する不安感の有無、何歳まで長生きしたいか等について調査している。対象者が未だ若いから、全般に老後の問題に関心が薄いことなどから、学校教育の場でこれからの高齢化社会へ向けて指導しなければならないいくつかの問題点を指摘している。

演題番号（307～308）

杉 浦 守 邦（蘇生会総合病院）

演題 307：「スギ花粉量調査と保健指導」最近スギ花粉によるアレルギー性鼻炎の多発が大きな問題となっている。長谷川らは、兵庫県内でも林業地帯に属する西脇小学校で、学校内におけるスギ花粉飛散状況を調査して保健指導に役立てようと企図した。その結果、当校運動場の花粉量は校区内全体のめやすとなること、飛散時には2階3階等風通しのよい教室に飛来の多いこと、屋外飛散量の多いときは体にうける花粉量も多いので屋外課業を制限する必要があることを明らかにし、特に努力しだいで教室内花粉量を低減させることの可能性を見出している。このことは重要であって、今後さらに総合的な予防対策樹立まで進むことを期待したい。

演題 308：「新安全テスト（新A P P検査）の試作研究」学校関係者として子どもの安全教育推進の立場からは、個々の児童の安全能力がどの程度そなわっているか、事故をおこしやすい傾向児をいかに早く把握するかといった問題は重要な課題である。松岡はこの2つの目的を達成するための簡易スクリーニング法としてさきにA P P検査を開発して学界に寄与したが、このたび最近の交通事情等に対応してこれを改訂し新A P P検査を考案して、標準化のための実験も終らせたという。問題構成は8つの内容からなり、実施時間も20～30分と短く、判定方法も容易であって、今後の応用発展が期待される。

演題番号（309～310）

松 岡 弘（大阪教育大学）

演題 309：「性教育のとりくみに関する一考察」（大阪市宮原中学校・角谷弘子）では、8年間の実践報告が行われた。(1)自己を知る（体の学習・命の尊重）、(2)共に生きる（仲間・異性・家族と共に）、(3)自らの生き方を考える（自立・将来展望）を中心に全校的取り組みで成果のあったことが報告された。これに対して、「学校規模や地域状況」の質問があったが、貴重な実践発表と評価できる。

演題 310：「自己の感覚に着目した自律を目指す保健指導の試み（Ⅰ）」（奈良市学校薬剤師会・北村翰男）では、朝礼の時間を利用して「動物達の伸び」の写真を見せながら「体操」を指導し、その効果をアンケート調査で確認した結果を報告した。「自律のための行動科学」を目ざすユニークな発表で今後の研究の発展を期待したい。

3. 学会長講演

大山 良徳：

“保健と体育との接点”のまとめ

座長 川 畑 愛 義（名誉会員・京都大学名誉教授）

学徒の発育発達に三十年近くにも及ぶ体系的研究の総合を要約的にのべた。即ち形態発育の時代差・季節差等につき、また運動機能についても文部省統計により同様時代差の特異性についてのべた。また形態発育と機能発達との独得の相関が性別にみられると、さらに形態発育発達に関する要因の比重の大きいものから栄養・遺伝・経済・運動の順序で関与していると、体育と保健とは車の両輪の如く協力して推進されなければならない、と。

4. 特別講演

三輪谷俊夫：

「輸入感染症と子どもの健康

—感染性下痢症を中心に—」のまとめ

座長 武 田 真太郎（和歌山県立医科大学教授）

3か月後に第15回国際微生物学会議の開催をひかえ、会長として準備にいそがしい大阪大学微生物病研究所の三輪谷俊夫教授から「輸入感染症と子どもの健康」と題して、感染性下痢症を中心とした特別講演を拝聴することができた。

関西国際新空港の開港時の予想入国者数は950万人をこえ、しかも発展途上国の多いアジア・アフリカからの便が全体の66%を占めると推定されている。これら発展途上国、とくに熱帯・亜熱帯諸国においては、現在もなお多くの感染症が猛威をふるい、乳幼児を中心に多くの犠牲者を出し、人々の生活を脅かし、貧困の重大な原因となり、国家の近代化と開発を阻んでいる。

一方、旧来の感染症を克服したわが国では、医療従事者は抗菌剤を過信して感染症に対する勉強を怠り、結核、腸チフス、コレラですら誤診するようになってきた。また、当然のこととして、国民の感染症に対する免疫力は低下している。そこへ、世界の各所からジェット機が感染症の潜伏期間内にわが国に飛来するのであるから、いろいろな感染症の病原体がヒトおよび食品を介してわが国に侵入してくる頻度が高くなっている。ここ10数年間のコレラに関する出来事をみても、有田市での流行、鶴見川の濃厚汚染、輸入エビによる集団発生など、ヒトの尿尿および輸入冷凍魚介類の解凍水や調理廃液によって、わが国の下水、生活環境水はコレラだけでなく、感染性下痢症全般の病原菌で濃厚に汚染されつつある。

この急増する入国者、輸入食品による輸入感染症に対応するには、抜本的な輸入感染症対策、防疫体制の確立が急務である。そして、それ以上に国民各自が正確な知識を習得し、自己防衛することが大切で、学校における保健教育の果たす役割も大きいと力説された。

5. 要望課題 (Y01 ~ Y05)

“都市化の中の子どもの健康” のまとめ

座長 佐 守 信 男 (名誉会員・神戸大学名誉教授)

「シンポジウムに代わる新しい方向」と学会通信66号でうたわれた一連の研究発表で、それは、学会長要望課題「都市化の中の子どもの健康」の応募演題の中から事務局によって選ばれた次の5題であった。

1 題目は、「今、学校医は何をなすべきか」という演題名で、大阪府医師会の玉井太郎氏は、アトピー性皮膚炎の増加から学校保健統計調査B表の改善を望まれた。また、日本学校保健会の会長には学校長の就任がよいとされ、学校医はそのために全面的に支援しなければならないと提案された。

2 題目は、「今、なぜ学校歯科保健か」を、大阪府学校歯科医会副会長の岡村親一郎氏が発表された。歯科疾患は生活疾患であるという考えのもとに、生活環境・生活習慣・食習慣などの改善を目指した保健学習の大切なことを論じられた。

3 題目は、「都市近郊農村地域の児童・生徒の健康実態—栄養摂取傾向と血液脂質について—」という演題名で、このことについての兵庫教育大と八代学院大の共同研究を、兵庫教育大の勝野眞吾氏が発表された。近年、わが国の生活様式の都市化、食生活の欧米化傾向が指摘されているが、淡路島五色町における子どもの健康実態調査からは、とくに考慮する必要がないことなどが報告された。

4 題目は、「都市化による大学生の心身の愁訴に関する研究」で、大谷大、日本生活医研、京都女大、京都産大の共同研究を、大谷大の瀬戸進氏によって報告された。

5 題目は、「都市化の子供の遊び運動変化が精神的健康・社会的発達にどのように影響しているか」を、京都府立大の日比野朔郎氏によって発表された。幼、小、中学生を対象に、学習・運動・掃除と友人関係の4場面のソシオメトリック・テストを行った結果の発表であった。

最後に佐守信男(座長)から、「都市化の中の子どもの健康」という要望課題から、文明と文化の関係が気にかかる。文明とは語源的には都市化のことであり、その意味では都市化は、人類の中でさまざま勢いで進展しており、とくにわが国の戦後の、文化を棚上げにした進展は、すさまじくはげしく、その渦中に子どもたちがいる。今や、子どもたちの健康を考える時、ただ単に病気や虚弱でないのみならず、文化(人間精神の活動)をも、棚からおろさなければならないのではないかとの提案があった。

6. 学会印象記 (1)

京都女子大学教授 米 田 幸 雄

第37回近畿学校保健学会は平成2年6月10日(日)に大阪大学健康体育部教授 大山良徳会長の肝入りで、なにわ会館(大阪市)で開催された。心配された雨も当日にはからりと晴れて、遠路参加される方も多く、立派な研究発表、熱心な質疑・討論があり、誠に実りの多い学会であった。

学会長講演は、現在の子どもの健康と発育発達の状況を多くのスライドを使って示され、保健と体育の関係が極めて密接であることを実証し、来聴者に首肯と満足感をあたえるものであった。特別講演では大阪大学微生物学研究所の三輪谷俊夫教授がコレラを例にとりて輸入感染症と子どもの健康について話され、私はコレラ輸入の歴史と現状、汚染地域の実例などを興味深くきき、輸入食品の安全性について想いを新たにした。何れの講演も、子どもの保健学習や指導に即刻、役立つもので、本学会に誠にふさわしい内容で深い感銘を受けた。

一般講演は29題にものぼり、会場は3つに分れて行われた。その内容は健康教育・健康指導に関するものが7題でトップ、以下多いもの順に生活習慣・生活意識に関するもの6題、精神衛生・カウンセリングに関するもの4題、疾病・傷害3題、パソコン関係のものが3題であった。演者も言われるようにスギ花粉症、水泳プール飛び込み時の事故などの防止は保健指導上、当面、確かにゆがせにできない問題と思う。また、生活や社会環境を考えるとメンタルヘルス、性教育も、今後、根気よく持続しなければならないし、それに応じてカウンセリングも必要であると痛感させられる。パソコン利用は学校保健の向上、近代化のために、今後、普及するであろう。女子大生の腰痛の調査研究があった。私は女子大学に勤務しているが、燈台下暗しで、帰って学生にきいてみると案外多くて驚いている。原因をしらべ、対策を考える必要があると思われる。

次に発表者に名前を連ねている人数を学校種別、所属別に分類してみると小学校8、中学校5、高校4、大学68、医師会、薬剤師会、研究所、病院などに所属する医師5、薬剤師1であった。また、口演者は、同じくこの順序に、4、3、2、18、1、1であった。学校保健当面の問題は、子どもとじかに接する現場の教員や学校三師の先生が最もよく知っておられる。学校保健学会発展のためにはこの方面からの出題が期待されるし、また、そのような施策も必要であろう。

最後に学会恒例の懇親会がなにわ会館の信貴の間で行われた。形式は立食パーティである。参加者は70～80名に達するであろうか、なかなか盛大であった。大山会長の挨拶を皮切りに始まったが、御性格のように学会の運営、会場の設営、懇親会など準備万端ととのっており、気持のよい学会であった。続いて、次期学会長の天理大学教授河瀬雅夫教授の挨拶があった。来年は新緑の古都、奈良で行われる模様で、期待し、楽しみにしている。会員間の談話もあちらこちらに花が咲いて、定刻を過ぎてもつきず、私も会場を離れたのは7時をまわっていた。

文末になったが、何時も「縁の下力持ち」である武田真太郎幹事長に深い謝辞を表して印象記を終る。

学会印象記（２）

「学会の成果を、学校現場にどのように生かすかが課題」

大阪成蹊女子短期大学 福 本 絹 子

梅雨の最中とは思えない程の好天に恵まれ、大阪において第37回近畿学校保健学会は開催された。一般講演では、第1会場に出席し、メンタルヘルス、カウンセリング、疾病・障害、運動の発表を聴いた。

印象としては、近年になく内容が具体的であったこと、特に「飛び込み時におけるプール事故防止対策への一考察」と題して、飛び込む児童の入水角度と体重が潜水深度にどのように影響しているのかを、モデル人形を用いて実験された結果の報告が、特に印象深く思えた。

学校現場の教職員にはこうした研究成果がすぐに役立であろうし、学校保健・安全・性教育を行うにあたって、分かっているようで実際にははっきり分かっていないこと、解明されねばならないし解明して欲しいことがらがいかにも多いかを、常日頃から思っている私にとっても、こうした研究報告はありがたいものであった。

ただ、こうした成果を学校現場へどうしたらよりよく伝えることができるかということである。本学会が開催される時期的な理由や、校長命令で参加する講習会や研修会、所属している研究会等への参加で出張回数がかさみ、学会にまで参加できる人が少ない実態も何等かの方法で解決しなければならない問題であると思う。

学会長講演は、子どもの発育・発達の変化を実に長い推移の中で統計的に分析して解かれ、現代っ子の特徴は勿論のこと、その将来までもが見えてきた。

そうした子どもを相手に我々が、保健は保健で考え、体育は体育のやりかたでやるというのではなく、保健と体育の補完のありかた、静的教育と動的教育の相乗効果への期待など、保健と体育の接点で今後どのように教育して行くべきかについての考え方をとかれ、新鮮な刺激を得させていただいた。

特別講演の、「輸入感染症と子どもの健康」は、特に感染性下痢症に限ってお話をされたが、講師の先生の豊富なご経験と資料が紹介されるにつれ、国際化が進み、海外渡航や食材料の輸入率が増加するにつれて、感染性下痢症の恐怖が日常的になっていることは承知していても、これまで深刻なことになっているとはと、驚かされた。

そして、この科学文明の時代においても、子どもたちの健康を守るには、手洗い指導の徹底や生食を避けること、冷蔵庫の管理を含めて日常の調理を衛生的に行うなど、従来からある自衛の手段・誰にでもできる消化器伝染病予防の基本的なことがらを日常的に行うことが最も大切であることを教えられた。

日頃の教育の中でなおざりにされがちな保健指導の重要性を強く感じたことであった。

新しい試みとして行われた会長要望課題は、都市化されている環境の下での子どもたちの実態を明らかにし、学校保健の意義を再確認しようとしたものであったが、時間不足のために、発表に続いての参加者による十分な討議ができなかったのが残念であった。

引き続きこのような企画を期待するものである。

学会印象記（３）

会長講演を拝聴して

奈良女子大学教授 山 本 公 弘

今までに数多くの学会に出席する機会がありました。それぞれに良い思い出があります。その中でも今年の近畿学校保健学会はとくに印象に残った学会でした。まず、会長講演に感銘を受けました。講演の内容は長年にわたり研究してこられた児童・生徒の発育に関する知見の集大成でした。もし私に過去の研究に基づいた講演をせよと命じられたとしても、大山良徳先生の百分の一のこともできません。

また、最近の児童・生徒の体力測定で柔軟性が低下したといわれているのは、下肢長の増加の表れという考え方も可能であることを示されました。今までは漠然とデータをながめて「そんなものか」と考えていた私でしたが、先生の柔軟な発想に接して目が覚める気分でした。長年、学会の度に親しくさせていただいた馴染みでもある、先生の講演を拝聴しながら先生に対する尊敬の念がいつそう強くなっていく思いでした。

会長講演を司会された川畑愛義先生の、司会の言葉はユーモアと愛情に満ちていました。先生のお人がらにより、会場がひととき温かい雰囲気になっていました。このことも私にとってはうれしいことでした。私たちに不足がちであった栄養素を先生から補給していただいた気持ちでした。ありがとうございました。

学会印象記（４）

―学校保健のメッカとしての学会―

神戸大学教育学部附属住吉中学校養護教諭 明 瀬 好 子

花の精を思わせるシャンデリアが輝く、瀟洒な学会活動のための快適環境をご用意くださった学会長はじめ関係の皆様感謝いたします。

さて、このたび私は一会員としてこの学会に参加させていただきましたが、そこで受けた感徳と所感をプログラムとは順不同ですが述べさせていただきます。

(1) 学会長要望課題「都市化の中の子どもの健康」について

私は、学校現場の養護教諭の立場より研究発表を拝聴いたしました。学校医、学校歯科医、大学関

係の方々など5氏から、専門的分野からの提言で、学校保健の将来の展望を得ることができました。しかし、今、私たちの前にいる義務教育課程の子どもの健康教育に携わる立場からの発表に欠け、課題に示された都市化の条件設定が曖昧であったと、帰路同輩と話を交わしました。また、この会場で座長を務められた恩師佐守信男神戸大学名誉教授のお元氣な姿に接し、なつかしいものが胸中をよぎりました。

(2) 学会長講演「保健と体育の接点」—子どもの発育発達の現状をふまえて—

学校現場での体育教師と養護教諭は、子どもの健康づくりの役割に連携が望まれます。平素、私たちは、学校体育の目指す目標に「より高く、より速く、より遠く」とか、「強健な体力と強い意志の育成」といったことを耳にします。そんな時、ふと疑問を感じたりすることがありました。このたびは、そんな課題をもって参加しましたので、私の求めるテーマでした。

元来、保健と体育は「点」で結ばれるものではなく、包括一体化され、一個の人間を中心に、その生存価値をお互いに認め合い、すべての人の生きることの質の向上に向けて行動する人間づくりを目指す学問体系ではないでしょうか。

(3) 一般講演

28題の演題は一応、健康教育7、生活意識・習慣6、運動・外傷5、発育発達4、精神保健3、教育機器3と分類されてはいたものの、その内容はさまざまで、3会場を走り回る姿が目立ちました。

私たち養護教諭にとって、この学会に参加するということは、その職種から毎日の学校活動の中で多くの子どもたちと出合っている関係上、日常の職務の中で健康の課題を発見し、研究実践を行い、学会発表を通じて、学識経験者のよき指導をいただきながら、研究の完成を見る場となると考えます。

今まで何回かの研究発表を通じて感じたことは、残念ながら、私たち養護教諭の多くが過去の教育の場で研究のありかたについての系統的教育指導を受ける機会がなかったことが悔やまれ、今後、養護教諭の養成（教育）機関での望ましい養護教諭像を目指したカリキュラムの改革・充実の必要性を痛感する機会となりました。

幸い私はこのたび、よき指導者・共同研究者のご指導を得て、中学校にウェルネス教育の導入を試み、その成果を発表させていただきました。その共同研究者の一人、本校の長瀬莊一教諭の健康教育への示唆に富んだ所感をここに添えさせていただいて、私の学会印象記に代えさせていただきます。

「子どもは、学習の中で自ら発見をした時、学ぶ意欲を急速に高める。そして学ぶ意欲が能動的な学習活動へとつながった時、子どもはその能力を急速に伸ばす。

今回のウェルネス教育の試みは、学校における健康教育に『発見』と『能動的な学習活動』を取り入れる一つの試みであった。その中で私たちは、子どもたちが運動、栄養、休養について深い関心をもち、健康の保持・増進を真剣に考えるようになったことに気づいた。方法論的には、パソコンを導入したことも効果があったのであろう。

健康における生涯教育ともいえるウェルネス教育が、保健室での教育にとどまらず学校全体に広がる日は近い。」

近畿学校保健学会名誉会員

(平成2年6月現在)

安藤 格 伊東 祐一 今井 英夫 岩田 正俊 小沢 忠治 川畑 愛義
黒田 健雄 小出 陽造 佐守 信男 圓山 一郎 山本 勝朗

近畿学校保健学会評議員

(任期平成2年4月15日～平成4年4月14日・五十音順 ○印は幹事、監は監事)

◇滋賀県

石樽 清司 (滋賀大)
伊藤 昭三 (市立大津公民館晴嵐分館)
鵜飼 房子 (養護教諭部会)
大村 芳子 (養護教諭部会)
川副 茂 (県学校薬剤師部会)
○木戸 増子 (県教育委員会)
桑名勇三郎 (県教育委員会)
小林 清基 (県医師会学校医部会)
立木 健 (県歯科医師会)
谷口 久男 (県歯科医師会)
中村 清美 (大津・長等小)
○林 正 (滋賀大)
藤井 義顕 (県医師会)
松本 美彦 (彦根・旭森小)
山岸 司久 (滋賀大)
山元 善弘 (県歯科医師会)
板持 紘子 (滋賀大・附中)
植村 良雄 (県医師会)
大音 晋一 (県薬剤師会)
○大矢 紀昭 (滋賀大)
蒲生 芳子 (長浜市教育委員会)
草野 薫子 (大津市教育委員会)
小西 實 (草津高)
島田 司巳 (滋賀大)
谷川 尚己 (草津・新堂中)
島居虔一郎 (県保健主事会)
南條 徹 (県医師会)
人見 晃司 (県歯科医師会)
萬木由利子 (養護教諭部会)
村山 綾子 (県立大津商業高)
山口 金治 (県学校薬剤師部会)

◇京都府

岩井 信之 (京大)
奥 正規 (京都市医師会学校医部会)
金山 政喜 (府医師会学校医会)
木村 静雄 (立命館大)
小西 博喜 (京都工芸繊維大)
庄司 博延 (京都女子大)
杉浦 守邦 (蘇生会病院)
高島 雅行 (京都市学校医会)
妻形八重子 (京都市教育委員会)
友久 久雄 (京都教育大)
長谷川博久 (府学校歯科医会)
平野登志子 (華頂短大)
古川 太一 (府医師会学校医会)
松永 武 (府学校歯科医会)
村上 知生 (府教育庁)
山岸似佐美 (京都・北白川小)
山田 良久 (龍谷大)
吉村磯次郎 (京都女子大)
○小川 隆三 (京大)
○金井 秀子 (京都教育大)
北村 李軒 (武田病院)
小島 廣政 (京都産業大)
嶋田 靖子 (府教育庁)
原田 昭 (府学校薬剤師会)
○瀬戸 進 (大谷大)
田辺 明之 (府医師会)
○寺田 光世 (京都教育大)
永田 久紀 (武庫川女子大)
○日比野朔郎 (京都府立大)
福田 潤 (府医師会)
牧野 節子 (府養護部会)
監 三宅 義信 (大阪薫英女子短大)
八木 保 (京都大)
山際 哲夫 (京都教育大)
吉岡 文雄 (神戸女子短大)
○米田 幸雄 (京都女子大)

◇大阪府

朝井 均 (大阪教育大)
阿部 昌宏 (大阪摂南大)
一色 玄 (大阪市立大)
○上延富久治 (大阪教育大)
大崎 恭 (大阪市学校保健会)
大塚 睦子 (府立堺養護学校)
小河 弘之 (大阪教育大)
角道 静枝 (大阪・扇町中)
○上林 久雄 (大阪成蹊女子短大)
楠本久美子 (大阪教育大附高天王寺)
後藤 章 (大阪教育大)
坂本 吉正 (大阪市立大)
白石 龍生 (大阪教育大)
新谷万里子 (大阪市教育委員会)
進 龍太郎 (大阪教育大)
陶山 勝彦 (府学校保健会)
田中 桂子 (淀川女子高)
東 真美 (大阪教育大)
天富美彌子 (大阪教育大)
井上 忠宏 (府医師会)
鵜飼 大策 (学校歯科医)
大迫 昌三 (大阪市学校薬剤師会)
○大山 良徳 (大阪大)
小野 忠義 (元 大阪女子短大)
川辺 克信 (大阪市天宗保育専門学校)
菊池恵美子 (大阪・北天満小)
黒田 誠二 (大阪市小学校保健主事会)
○後藤 英二 (大阪教育大)
島津 健三 (府医師会)
白木彌一郎 (府学校薬剤師会)
杉山美代子 (大阪市養護教員会)
須藤 勝見 (大阪教育大)
高階 経昭 (府医師会)
玉城 晴孝 (府医師会)

辻 立世 (府立千里高)
 中内 正己 (淀商業高)
 花原 節子 (大阪基督教短大)
 福本 絹子 (大阪成蹊女子短大)
 古田 肇子 (大阪女子短大)
 本庄 康一 (大阪・矢田北小)
 ○松岡 弘 (大阪教育大)
 松原ヒサエ (元 日本生活医研)
 美馬 信 (大阪女子短大)
 三村 信子 (大阪・海老江西小)
 森 喜代子 (大阪・開平小)
 柳井 勉 (大阪教育大)
 山本 信弘 (大阪教育大)
 ○吉田 浩重 (神戸芸術工科大)

◇兵庫県

青山 泰子 (神戸・苅藻中)
 荒木 勉 (兵庫教育大)
 和泉 正人 (学校医)
 植田 誠治 (神戸学院大)
 岡本 靖子 (県立長田高)
 家治川 豊 (甲南女子大)
 勝山 信房 (近畿大)
 北口 和美 (西宮市教育委員会)
 島田 照三 (島田クリニック)
 高橋 裕子 (県立姫路短大)
 田中 洋一 (神戸大)
 出井 梨枝 (神戸・須磨高)
 長谷川ちゆ子 (西脇・西脇小)
 ○美崎 教正 (神戸大)
 南 哲 (神戸大)
 村井 俊郎 (県学校歯科医会)
 ○山城 正之 (神戸大)

◇奈良県

荒地 秀明 (天理大)
 浦久保 繁 (県教育委員会)
 ○河瀬 雅夫 (天理大)
 北村 翰男 (県学校薬剤師会)
 杉村 貢 (県教育委員会)
 ○橋 重美 (神戸学院大)
 ○出口 庄佑 (奈良女子大)
 中和田 勝 (県教育委員会)
 福岡 保郎 (県歯科医師会)
 藤田 康子 (県教育委員会)
 森井 博之 (天理大)
 矢奥まり子 (県立大宇陀高)
 山下 節義 (奈良医大)
 吉田知也子 (県立郡山高)

◇和歌山県

猪尾 和弘 (和歌山大)
 岩本 謙三 (県学校薬剤師会)
 柏井 洋臣 (県学校医会)
 金尾 宏 (県学校薬剤師会)
 木下 裕 (県医師会)
 坂口 弘一 (県医師会)
 谷口 久雄 (県教育委員会)
 虎谷 良雄 (県医師会)
 中村 淳一 (県医師会)
 ○橋本 勉 (和歌山医大)
 松浦 清 (県薬剤師会)
 松本 健治 (和歌山医大)
 宮西 照夫 (和歌山大)
 森 道子 (県教育委員会)

○仲井 正名 (大阪教育大)
 難波 英子 (関西女子短大)
 平井 富弘 (大阪大)
 藤岡 千秋 (大阪教育大)
 堀内 康生 (国療・仙石荘病院)
 増田 勉 (四天王寺国際仏教大)
 松嶋 紀子 (大阪教育大)
 南口 公恵 (大阪女子短大)
 三村 寛一 (大阪教育大)
 三好 暢子 (大阪市教育委員会)
 門奈 丈之 (大阪市立大)
 山下 秋二 (大阪大)
 吉田 熙延 (心斎橋健康クラブ)

明瀬 好子 (神戸大・附属住吉中)
 五十嵐裕子 (神戸大・附属明石中)
 今出 悦子 (西宮・西宮高)
 内山 三郎 (神戸大)
 奥田 幸子 (神戸・兵庫商業高)
 ○勝野 真吾 (兵庫教育大)
 川畑 徹朗 (神戸大)
 近藤 文子 (兵庫女子短大)
 ○住野 公昭 (神戸大)
 立石 光代 (県立夢野台高)
 塚本 利之 (兵庫医大)
 橋野 静子 (神戸・楠高)
 原田 碩三 (兵庫教育大)
 水野 陽子 (県教育委員会)
 三野 耕 (兵庫教育大)
 室 明 (県学校薬剤師会)
 監 横尾 能範 (神戸大)

有山 雄基 (県医師会)
 唐沢 友江 (養護教諭高校会)
 喜多 稔 (県薬剤師会)
 嶋田 良文 (県教育委員会)
 竹田 斌郎 (奈良市医師会)
 谷掛 駿介 (奈良市医師会)
 中牟田正幸 (奈良教育大)
 西信 元嗣 (奈良医大)
 福島美登里 (奈良・三碓小)
 的場 一晃 (奈良市医師会)
 守田 幸美 (県養護教育研究会)
 八木 哲 (県学校医部会)
 ○山本 公弘 (奈良女子大)
 和田 清麿 (県教育委員会)

井原 義行 (県高野口保健所)
 笠松 勇次 (鳴戸教育大)
 加藤 弘 (和歌山大)
 川口 吉雄 (県学校歯科医会)
 左海 伸夫 (スミヤ・スポーツ科学センター)
 ○武田真太郎 (和歌山医大)
 ○辻本 信輝 (県歯科医師会)
 中 俊博 (和歌山大)
 中村 靖男 (県医師会)
 堀 美津子 (橋本・紀見東中)
 ○松岡 勇二 (和歌山大)
 宮下 和久 (和歌山医大)
 米良 至剛 (新宮市医師会)
 ○矢田 俊作 (和歌山市学校保健会)

山田 一 先生の御逝去を悼む

本学会名誉会員、山田 一 先生(80才)は平成2年7月11日に肝臓ガンのため逝去されました。

先生は明治43年6月1日に奈良県高取町に生まれ、昭和16年12月京都府立医科大学を卒業、同大学内科学教室副手、助手を経て同大学附属甲種看護婦学院教授、この間同36年3月医学博士の学位を取得、同43年4月滋賀大学助教授教育学部に採用され、同45年4月同大学教授に昇任、同51年3月定年により退職されました。退職後同年4月京都文教短期大学教授に就任し、同59年3月退職し、同59年4月から同短期大学特任教授に就任し、平成元年3月に退職されました。この間先生は永年にわたって、看護教育、教員養成教育並びに短期大学の教育において尽力し、有為な人材を育てられました。とりわけ滋賀大学教育学部にあつては、生理学、衛生公衆衛生学、救急処置等の健康学領域を担当し、今日の健康教育の充実の基礎づくりに努力され、昭和48年～50年には同大学評議員として大学行政にも貢献されました。さらに県下学校保健の発展のため、三師会、養護教諭、大学との協力関係を一層推進し、昭和48年4月には滋賀県学校保健学会を設立し、同55年3月まで会長を歴任、この間昭和49年6月には第21回近畿学校保健学会会長を務め、同55年6月には本学会名誉会員に推挙されました。今年の6月に開催された、なにわ会館での本学会では、お目にかかったばかりでしたが、先生にとっては最後の学会参加となりました。

ここに生前のご功績の一端を偲び深く哀悼の意を表します。

(林 正 しるす)

平成2年度会費納入について

昭和57年度より学会会則が改正され、会員制が明確に打ち出されております。したがって、年会費を納入されないと、翌年度から学会通信その他の案内が送られなくなります。

平成元年度および平成2年度の会費(各3,000円)が未納の会員の方は、至急同封の振替用紙を使って、学会事務所まで納入されますようお願いいたします。